

お母さんはえらいな

小川未明

青空文庫

いちばん下の勇ちゃんには、よくおなかをいためるので、なるべく果物はたべさせないようにしてありましたから、ほかの兄さんや、姉さんたちが、果物をたべるときには、勇ちゃんの遊びに出て、いないときとか、また夜になって、勇ちゃんが寝てしまつてから、こつそりとたべることにしていました。

「僕、びわがたべたいのだけど。」

「私は、水蜜がたべたいわ。」

兄さんや、姉さんたちは、果物の季節になると、いろいろおいしそうな、果物が、店頭てんとうに並ぶならのを見てきて話をしました。

「晩に、勇ちゃんが休んでから、買ってきておたべなさい。」と、お母さんは、おつしやつたのであります。

ところが、ある日のこと、お土産に、みごとにパイをもらったのでした。

「まあ、おいしそうですね。」と、お姉さんが、いいました。

「お母さん、すぐに、切つておくれよ。」と、太郎さんが、いいました。

「果物がいっているから、勇ちゃんは、たべていけないのですね。」と、二郎さんが、

パイをながめながらいいました。

さつきから、やはりだまって、おいしそうな大きなパイをながめていた、勇ちやんは、これをきくと真つ赤な顔をして、二郎さんにとびつきました。

「そんなこと、あるもんか、僕、みんなたべるんだい。」と、けんかがはじまったのでした。

「ああ、これは、勇ちやんもたべていいんですよ。」と、お母さんが、おっしゃったので、やつと勇ちやんの怒りは解けましたが、

「僕、たくさんもらうんだ。」と、勇ちやんが、がんばると、

「ずるいや、お母さん、公平に分配してくださいね。」と、二郎さんが、叫びました。

「お母さんは、いつも、公平に分配するじゃありませんか。」

このとき、二郎さんが、メートル尺を持つてきたので、みんなは、笑い出しました。

パイをたべた後で、お母さんは、たなからゼリビズのはいった袋をおろして、四人の子供たちに、分けてくださいました。色とりどりの曲玉形のお菓子は、めいめいの前にあつたさらの中がかがやいて見えました。

「僕のは、これんばかり。」と、太郎さんがいいました。

「姉ちゃんねえが、いちばんたくさんだ。」と、二郎じろうさんがいました。

「いいえ、みんなおんなじですよ。かんじようをしてごらんなさい。」と、お母かあさんがいわれました。四人にんはかんじようすると、いちばん小さい勇いさむちゃんのが、一つ多おほかったです。で、三人にんのゼリビンスの数かずはまったくおんなじだったのです。

「それごらんなさい。お母かあさんは、かんじようしなくても公こう平へいでしょう。」

「お母かあさんは、えらいな。」と、子供こどもたちは感かん心しんして目めをみはりました。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 10」講談社

1977（昭和52）年8月10日第1刷発行

1983（昭和58）年1月19日第6刷発行

※表題は底本では、「お母《かあ》さんはえらいな」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：仙酔ゑびす

2012年2月19日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

お母さんはえらいな

小川未明

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>